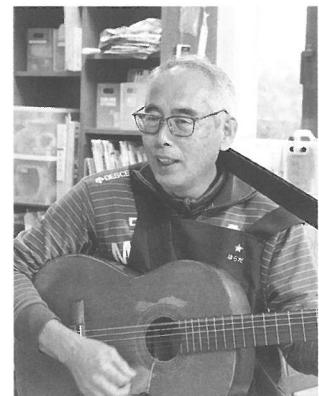


私に
人生と
言えるものが



原田文孝

はらだ　ふみたか／1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかかわり続ける。NPO法人さきゆり会代表

第8回 人生、一人じゃ生きていけない

私は、担任してきた子どもたちを、大勢亡くしています。施設訪問学級に7年間いましたが、その間でも担任している子どもが2人亡くなりました。施設では、障害が重く、高齢の人たちが多くつたので、7年間に何人も亡くなつた人を見送つてきました。

52歳の大山さん（仮名）を担任したとき、大山さんたちは、友だちが亡くなるついくことをどう感じているのだろうか、人が亡くなることをどう考えているのだろうかと思いました。大山さんたちは、友だちが亡くなつたことは知つてゐるのですが、職員さんは動搖させてはいけないと思つてゐるのか、何も伝えていませんでした。私は、大山さんたちは、友だちが亡くなつたことをちゃんと知りたいと思つてゐるし、一緒に悲しみたいとも思つてゐるのではないかと考えました。私は、人が亡くなることを多く体験してきた大山さんに、人の死について考える授業が必要だと思い始めました。

大山さんは、7歳で入所して45年間暮らしています。左手の随意性が高く、ゆっくりかぶつてゐる帽子を脱ぎます。発

音は不明瞭なところがありますが、よくしゃべりかけ、わざと反対のことを言つてみんなを怒らせ、「天邪鬼あまのじやく」と言われていました。学校文化への憧れがあり、33年ぶりに訪問学級の高等部に入学してきました。

亡き人と出会う文化を

立ち上がりてくるよろは思なることがあ
ります。

ある夜、ラジオを聴いていると、評論
家の若松英輔さんが死について語つてい
ました。なにかヒントになりそうだと思
つて、『君の悲しみが美しいから、僕は
手紙を書いた』（2014）という本を
読んでみました。若松さんは「死者はし
ばしば自然を『言葉』として語ることが
あるのを感じます。また、あるとき自然
は、無言のうちに死者が近くにいること
を教えてくれことがあります。リルケ
という詩人は、花を見るとき死者の存在

を感じ、果実には死者の思いを感じると書いています」「今では、お墓の意味も変わつてきました。墓所は死者の居場所ではなく、生者と死者の待ち合わせ場所のような感じがします」と述べています。

私はこれを読んで、「そうか、お墓は、亡くなつた人と出会う場所なんだ、お墓は亡くなつた人と出会う文化なんだ」と思い、こうした亡くなつた人と出会う文化を教材化して授業をつくるうと考えました。考えてみると、毎朝、仏壇に線香をあげているのは、亡くなつた父と母に私は出会つているのでした。

授業の目標と題材

天邪鬼と言われている大山さんは、職員さんと結構もめっていて、大山さん自身もしんどい思いをしていました。

大山さんのめざす姿として「他者とのかかわりを通して自分を振り返り、内省

授業の様子

授業の様子を記録から紹介します。「畑

歌を歌い、絵本『でんごくのおとこや』を読み語ることにしました（実際、大山さんのお父さんは亡くなっています）。

で花を摘む。枯れている花は『いや』と言つてきれいな花を選んだ。『大きな古時計』を歌うと、知つてゐる所は一緒に歌つた。生まれる→成長する→死んで天国に行くという話をわかつてゐるようだつた。私が『天国』と言つて天井の方を